

Lynn Loo + Guy Sherwin 解説

2015年9月1日 (音楽実験室 新世界)

阪本裕文



*1 2003年には「SHOOT SHOOT SHOOT」と題されたイギリス実験映画の回顧プログラムが生まれ、イギリス国内外を巡回した。同名のDVD作品集もLuxよりリリースされている。

V.A - Shoot Shoot Shoot British Avant-Garde Film of the 1960s & 1970s (Lux, Re-Voir 2006)

*2 Peter Gidal, Theory and definition of Structural / Materislist Film, Structural Film Anthology, BFI, 1976, pp.1-22

ピーター・ジダル (西嶋憲生訳)、「構造的=物質主義的映画の理論と定義」、イメージフォーラム 2巻12号、ダゲレオ出版、1981、pp.82-89

ピーター・ジダル (西嶋憲生訳)、「構造的=物質主義的映画の理論と定義下」、イメージフォーラム 2巻14号、ダゲレオ出版、1981、pp.86-95

*3 P. Adams Sitney, Structural Film, Film Culture Reader, Cooper Square Press, 2000, pp.326-348

P・アダムス・シトニー (石崎浩一郎訳)、「構造映画」、『アメリカの実験映画〈フィルム・カルチャー〉映画論集』、フィルムアート社、1972、pp.187-215

I：イギリスの実験映画史概説

イギリスの実験映画は、ニューヨークのフィルムメーカーズ・コーポラティブの影響を受け、1966年にロンドン・フィルムメーカーズ・コーポラティブ(LFMC) *1が設立されることによって開始される。LFMCは、詩人のボブ・コビンが組織した「シネマ65」を前身としており、その当初の活動拠点もコビンの運営する書店ベター・ブックスであった。やがて、LFMCは拠点を点々と移動しながらフィルム現象のための設備を整えて、作品の上映・配給だけでなく、作家本人による映画フィルムの自家現像を支援するようになる。これによって、作家が現像所に頼らずに、フィルムの制作工程に全面的に関わることが可能となった。このLFMCに集った作家達の映画には、概ね共通する傾向があった。それは、ピーター・ジダル (Peter Gidal) が提唱した「構造的=物質主義的映画」(Structural / Materiarist Film) *2の理論に影響を受けることによって形作られたものであったといえる。

「構造的=物質主義的映画」のコンセプトを説明するためには、先に実験映画史のなかに現れたひとつの動向である「構造映画」(Structural Film) について触れなければならない。アメリカをはじめとした国々の実験映画においては、1960年代半ば頃から、その映画を形成している構造を前景化させるという新しい試みが現れていた。評論家のP・アダムス・シトニー (P. Adams Sitney) は、そのような映画に「構造映画」という呼称を与えた*3。それは、通常の映画にみられるようなナラティブ (物語) 的な叙述によらず、映画を形成している構造それ自体を観客に経験させる映画である。ただし、シトニーは構造映画の特徴として「カメラ位置の固定」、「光の明滅効果」、「ループ状プリント」、「スクリーンの再撮影」という4点を挙げているが、これらは必要条件ではなく、その定義も明確なものではなかった。それに対してイギリスで展開してゆく「構造的=物質主義的映画」の理論と作品群は、映画の構造に着目するという方向を、唯物論的思考によって徹底的に突き詰めてゆくことになる。それはナラティブ (物語) 的な叙述の拒否だけでなく、「再現」に関わる映画のイリュージョニズムを徹底して拒否することによって、映画的イリュージョンがもたらすイデオロギー的なものの支配を批判しながら、弁証法的に、あらゆるレベルにおいて映画生産過程を分析し直そうとするものであった。それは通常のスクリーン上映にとどまらず、上映される空間と映写機の光の関係や、さらにはパフォーマンスまでも表現の射程に含めながら、エキスパンデッド・シネマ (拡張映画) の形態でも展開された。このような映画を実践的に制作した作家としては、ジダルをはじめ、マル

コム・レグライス (Malcolm LeGrice)、アナベル・ニコルソン (Annabel Nicolson)、アンソニー・マッコール (Anthony McCall)、ウィリアム・レイバン (William Raban)、クリス・ウェルズビー (Chris Welsby)、そしてガイ・シャーウィン (Guy Sherwin) といった名前を挙げる事が出来る。このような映画は、観客に能動的な読解、あるいは分析への参加を求めるものであり、一見難解なものに思えるかもしれない。しかし、このような映画を観てそれを難解と感じる瞬間——観客はイリュージョンに囚われて受動的に映画を観るという状態から、自分自身を解放しているのだと言える。

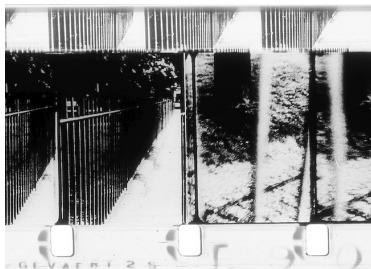
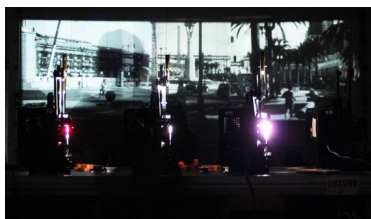
このようなLFMCにおける「構造的=物質主義的映画」への取り組みは、その一方で、当時の実験映画/アンダーグラウンド映画に顕著に見られたような、パーソナルな視点の強調や、反体制的でラディカルな表現への追及を、どちらかといえば周縁に追いやることになった。そのような表現を追及した作家としては、例えばステファン・ドウスキン (Stephen Dwoskin) や、ジェフ・キーン (Jeff Keen)、デビッド・ラーチャー (David Larcher)、あるいはアンソニー・バルチ (Antony Balch) などが挙げられる。また、同時期にはデビッド・ホール (David Hall) などによるビデオアートへの取り組みも、LFMCとは別に開始されていた。やがて、1970年代後半になると「構造的=物質主義的映画」の実践的な取り組みは、ある種の反動を生み出して後退してゆく。そして、簡便なスーパー8カメラを手にし、商業文化にも親和性を持った次の世代、すなわちデレク・ジャーマン (Derek Jarman) や、ピーター・グリーンナウェイ (Peter Greenaway) といった作家達が台頭してくることになる。

以上、イギリス実験映画の歴史と意義を簡単に解説した。最後に一つ強調しておきたいのは、「構造映画」や「構造的=物質主義的映画」の実践によって開かれた映画の可能性とは、特定の映画の媒体、すなわちフィルムだけに結びついたものではないということである。今回上映されるリン・ルー (Lynn Loo) とシャーウィンの映画は、観客に対して「映画を成立させている条件とは何か」という問いを提起し、様々な形態の別の映画を生み出す契機をもたらすものと言える。それは、映画がフィルムからデジタルへと置き換わりつつある移行期において、重要な示唆を私たちに与えるものとなるだろう。

2: ガイ・シャーウィンとリン・ルー

ガイ・シャーウィン (Guy Sherwin)

1948年、イギリス出身。実験映画作家。ロンドン芸術大学で絵画を学ぶ。1970年代よりロンドン・フィルムメーカーズ・コーポラティヴに関わり、フィルムの現像技術についての指導を行う。実験映画のなかでも、エクспанデッド・シネマと呼ばれる、通常のフィルム上映とは違った方法を用いることによって、映画上映のあり方を問い直したような作品を数多く手がけている。特にシャーウィンのエクспанデッド・シネマは、複数の映写機を即興的に使用した作品が多く、パフォーマンス的な要素が強い。また、エクспанデッド・シネマだけでなく、いわゆる「通常の上映」による映画も手がけているが、映写機のサウンドトラックの機構に着目した作品や、カメラと被写体の関係に着目した作品など、映画のあり方を問い直すという姿勢が一貫して存在している。ロンドン・フィルムメーカーズ・コーポラティヴの後継組織であるLUXからは、DVD作品集として『Optical Sound Films 1971-2007』(2007)、『Messages』(2010)、『Short Film Series 1975 - 2014』(2014) がリリースされている。



図版は上段より、以下のタイトルの順。

Cycles #3

Bay Bridge from Embarcadero

Railings

・Cycles #3. 1972/2003, 9min

二つのフィルム上に焼き付けられた円形のイメージが、二台のプロジェクターによって映写され、一つのスクリーン上でスーパーインポーズされる。この円形のイメージは、それぞれ異なる周期で明滅しており、相互の干渉によってリズムを生みだしながら激しいフリッカーを引き起こす。

・Bay Bridge from Embarcadero. 2002, 10min

同じ場所で撮影されたが、異なる時間を持った三つのフィルム。この三つのフィルムを横向けに並べて映写することにより、パノラマとして再現する。そこでは微妙に異なった時間を内包する空間が立ち上がる。

・Railings. 1977, 10min

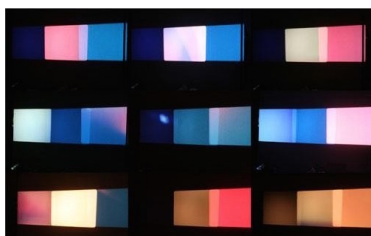
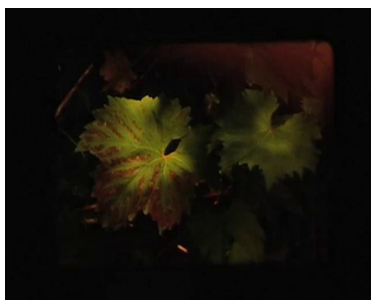
横向けにしたカメラによって撮影された手すりの映像。この手すりのイメージは、フィルム上のサウンドトラックにも入り込んでおり、そのまま光学的にサウンド変換される*4。このフィルムの編集は複雑なものであり、サウンドはイメージに対応して一定のリズムを形成する。この作品は映写機を90度横転した垂直フォーマットで上映される。

*4 映画フィルムにおける光学式のオプティカル・サウンドトラックには、波形が焼きこまれている。これを映写機が読み取ることによってサウンドが再生される。そのため、サウンドトラックに波形に似たパターンが焼きこまれていた場合には、形状に応じたサウンドに変換される。

リン・ルー (Lynn Loo)

シンガポール出身。実験映画作家／フィルムアーキビスト。シカゴ美術館附属美術大学で実験映画を学び、その後、イギリスのイースト・アングリア大学でフィルム・アーカイビングについて学ぶ。1997年より映画制作を開始し、2004年にロンドン・フィルムメーカーズ・コーポラティヴに関わった作家による1970年代





図版は上段より、以下のタイトルの順。

Washi #2

Autumn Fog

End Rolls

のイギリス実験映画に触れて、複数の映写機を使用したエクспанデッド・シネマの上映にも取り組むようになる。2005年以降は、シャーウィンと共同で、パフォーマンス的なエクспанデッド・シネマを多数上映している。

・Washi #2. 2014, 10min

複数の映写機を使用することによって、斜線のパターンが一つのスクリーンの上で多重化され、幾何的な抽象パターンが展開される。これに加えて、映写機レンズ前に設置された二つのフォトレジスタがランプ光に反応して、断続的なノイズを発生させる。

・Autumn Fog. 2012, 8min (short version)

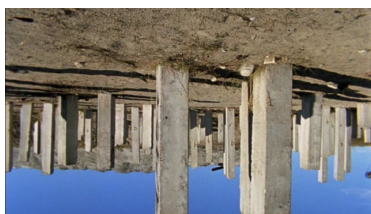
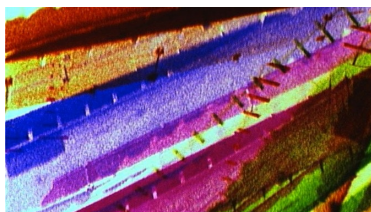
秋の庭の草木を撮影したフィルムを元に、ネガフィルムとポジフィルムを作成し、これを複数の映写機によってスクリーン上で重ね合わせる。それによって、ソラリゼーションのようなイメージが形成される。

・End Rolls. 2011 12min

ろうそく、ストーブ、火、ルームライトといった異なるレベルの光によって、異なる色彩を持った複数のフィルム。これらを複数の映写機によってスクリーン上で重ね合わせる。それによって複雑な光の干渉が生じる。これに加えて、フォトレジスタがランプ光に反応して、ノイズを発生させる。

3：ヨーロッパの女性作家プログラム

リン・ルーのプログラミングによる、近年のヨーロッパの女性作家プログラムを上映する。風車の映像をフィルムのオプチカル処理によって抽象的なイメージに変換する『Red Mill』、古いアルバムの写真と動画によって過去と現在を構成した『Stretto』、遊ぶ子どもらの運動を断片化して構成する『Girls』、シンプルな操作で空間を大胆に変貌させる『Traveling Fields』など、多彩な表現によるプログラムとなっている。なお、以下のリストでは、プログラマーの希望により、制作年を記載していない。



図版は上段より、以下のタイトルの順。

Red Mill

Stretto

Traveling Fields

・Red Mill - ESTHER URLUS with sound by Matt Kemp (Netherlands) 5min (16mm *Digital Screening)

・Stretto - BARBARA METER (Netherlands) 7min (16mm *Digital Screening)

・Girls - HELGA FANDERL (German) 2min (super-8mm *Digital Screening)

・Traveling Fields - INGER LISE-HANSEN (Norway) 9min (35mm *Digital Screening)